

『琵琶伝』に見る鏡花の恋愛至上主義

—— 婚姻制度に対する問題提起 ——

田 中 裕 理

はじめに

二年前に『琵琶伝』を扱い「夢・幻想」の観点から鸚鵡の登場による効果を考察し、『琵琶伝』は「観念小説」ではなく「幻想小説」であることを論じようと試みた。今回はその逆で『琵琶伝』は「幻想小説」ではないという論を進めていきたいと思う。「大衆と国」や「家族と親族」などの観点から、社会の状況、婚姻制度や鏡花の恋愛・結婚観について見ていくことを通して『琵琶伝』における主題とは一体何であるのかを考察したい。

一 『琵琶伝』の解釈とその変遷

『琵琶伝』は尾崎紅葉の『やまと昭君』^三を先行作品としてかかれた小説である。その他、中国の『琵琶行』^四『琵琶記』^五も先行作品であり、王昭君の故事^六からも影響を受けている。『琵琶伝』の発表後、この作品がどのように受け入れられ解釈されてきたか、その

変遷を最初に見ていくこととする。

一八九五(明治二十八)年五月に発表された『夜行巡査』が鏡花の文壇出世作である。発表当時は日清戦争の影響で近代東京は初めて資本制の下での都会的貧困を経験していたという社会背景があり、社会と人間の暗黒面をえぐりだす新思想を叫ぶ作家出現、という形で鏡花は文壇に迎えられた。しかし「観念小説の作家」として文壇に認知されるということは、鏡花にとつては不本意なこともあったようである。

『琵琶伝』は一八九六年の発表当時はあまり良い評価を得られていなかったようである。「青年文壇」では奇怪なるロマンティズムに将来を期待するといった趣旨の評価が書かれたものの、一方「帝國文学」^九では奇怪すぎてほら吹きのお話のようであるため、出来そこないの作であるとの酷評を受けている。これはこの作品が、妻が夫の咽喉を食い破るという奇怪すぎる話であるために読者がついていけない、評価が悪かったのではないかと考える。

その後一九九〇年頃までの先行研究などでは『琵琶伝』から反戦小説としての要素を読みとり「観念小説」として解釈を進めている論文が多く見られる。事実『海城発電』と『琵琶伝』は反軍反戦的

な内容とみなされ、鏡花没後一九四〇(昭和十五年)年から一九四二(昭和十七年)にかけて刊行された岩波書店版『鏡花全集』には収録されなかった。『琵琶伝』は結婚制度について読者の胸に鋭く因習打破の叫びを投げかけた観念小説である、との論を展開する研究が見られるようになる。

現在では「幻想小説」として作品を読み解く論文が多く、それが一般的であるようである。脇氏は、幻想的な文体が内容を追い越し何かを言おうとしているのが「鏡花世界」であると述べている。二〇上記の先行研究の変遷などをふまえてみても、現在『琵琶伝』は幻想小説であるとの見方が一般的である。しかしこの作品にも他の観念小説の作品と同じように、当時の社会に対する鏡花の見解が含まれているはずである。次の章からは、鏡花の独特の作風である幻想・怪奇小説の手法をとっているために一読では分かりにくくなっている作品の根底にある主張とは一体何だったのかを見ていきたい。

二 反戦的な風刺小説としての一側面

『海城発電二』と『琵琶伝』は反軍反戦的な内容とみなされ、鏡花没後の一九四〇(昭和十五年)年から一九四二(昭和十七年)にかけて刊行された岩波書店版『鏡花全集』には収録されなかったという経緯がある。この章では、『琵琶伝』のどのあたりが反軍・反戦的であるのか、また鏡花は反軍・反戦を訴えたかどうかがどうかを考えた。作中には戦争に関連のある描写がいくつも出てくる。以下に戦争に関連のある描写をいくつか引用し、考察をしていくこととする。

謙三郎もまた我我国徴兵の令に因りて、予備兵の籍にありしかば、一週日以前既に一度聯隊に入営せしが、其月其日の翌日は、旅団戦地に発するとて、親戚父兄の心を察し、一日の出営を許されたる(中略)永き離別を惜まむため、朝来こゝに來り居り、(中略)帰營の時刻迫りたれば

日清戦争時多くの一般人が招集された。謙三郎もその一人であり、翌日から戦地へ向かうことになっていた。生きて帰れないだろうという思いもここから読みとれる。

(「略」お前、軍に行くといふ人に他に願があるものかね。」「は、脱營でも何でもおし。(中略)」「何、私の身は何うならうと、名譽も何も構ひませんが、其では、其では、国民たる義務が欠けますから。」(中略)叔母「何が欠けようとも構はないよ。何が何でも可いんだから、これ唯だ一目、後生だ。頼む。逢つて行つてやつておくれ。」(中略)謙「可うございます。何とでもいたして屹と逢つて参りませう。」

ここには戦地に行く側と残される側の感覚の違いが表れている。謙三郎はお通に会う事を叔母に懇願され、国民としての社会への義務か、愛を貫いて脱營するかでゆれる。しかし考えてみれば叔母もなかなか勝手な事を言っていると思うのだが、戦地へ行つても脱營をしても、どちらを選んでもどのみち死ぬのだからという考えからだろうか。

脱營をなすつたつて。もう、お前も知つてる通り、今朝ツから何の位、おしらべが来たか知れないもの、おつかまりなさりや其ツ切きりぢやあ無いか。

脱營を選びお通に会いに来た謙三郎に會わせてほしいと、見張り役伝内に頼む際のお通の言葉である。脱營すれば厳しい処分があることは皆周知の事実。それでも命を賭して逢いに行く謙三郎の姿を描いているが、これは戦時中の制度への抗議ともとれるのではないだろうか。

銃剣一閃し、鬨を切つて、「許せ！」といふ声もろとも、咽喉に白刃を刺されしまゝ、伝内はハタと僵れぬ。

先行作品である『やまと昭君』に出てくる武器は刀だが、『琵琶伝』で出る武器はすべて銃である。この場面では銃剣を使用しており、作中では銃で何人も人が死んでいる。この場面では謙三郎は「愛」を言い訳に伝内を殺すが、「大義名分」のために行う戦争と構図が重なつて見える。

武歩忽ち丘下に起りて、一中隊の兵員あり。樺色三の囚徒の服来たる一個の縄付三を挟みて限界近くなりけるにぞ、お通は心から見るともなしに、ふと其囚徒を見るや否や、座右の良人を流目にかけつ。嘗て「何うするか見ろ」と良人がいひし、それは、すなはちこれなりよ。お通は十字架を一目みてしだに、なほ且つ震ひをのゝける先の状には引変えて、見る／＼囚徒が

面縛され、射手の第一、第二弾、第三射撃の響とゝもに、囚徒が固く喰ひしぼれる唇を洩る鮮血の、細く、長く其胸間に垂れたるまで(中略)銃殺全く執行されて、硝烟の香の失せたるまで

上記は謙三郎処刑の日の回想シーンである。囚人の服を着せられて縛られ、パンパンバンと三発撃たれて処刑される様子が描かれている。銃殺後の謙三郎の血の滴る様子が目に見えるようで、とても痛ましい。先行作品の『やまと昭君』では妻だけが刀で切り殺されるが、対する『琵琶伝』では戦争に関わる描写が多く、恋人も殺される。この残酷な処刑をお通に見せているこのシーンは日中戦争時の旅順虐殺事件^四の風刺なのではないかと考えた。

幻想小説と解釈される『琵琶伝』において、この謙三郎の処刑場面はとても残酷で現実的である。お通が咽喉を喰い破つて死ぬ幻想的な結末に比べ、謙三郎の死に方は戦時中の社会を反映した現実性を感じられる。縛られて銃殺されて血を流す凄惨な描写は日清戦争時の旅順虐殺事件を連想させるこの処刑場面には、反戦の意もこめられているのではないか。

『琵琶伝』には反軍・反戦の風刺の「観念小説」としての側面は確かにあると思われる。しかし物語の奇怪さにのまれてしまい、少々軍事的な要素が目につきにくくなっている印象を受ける。『琵琶伝』の執筆がちょうど日清戦争直後であったため、鏡花の戦争に対する思いが作品に組み込まれてはいるだろうが、これだけでは鏡花が『琵琶伝』で反戦を訴えたかったのだとは言い切れない。時期的なものもあいまって、反戦的な内容を含んでいるという側面を持つた作品ではあるが、主題はもつと他のことなのではないだろうか。

三 キリスト教との関連性

鏡花は十二歳から十五歳までの四年間、故郷の金沢でミッシヨンスクールに通っている。学校の名は「真愛学校」、「北陸英和学校」の前身である。この学校と鏡花の生家はとても近く子供の足でも十分はかからない距離^{一六}であった。なぜ真愛学校に入学することになったのか。「一つ目は鏡花の家の向かいに真愛学校校長^{一七}が開くキリスト教の講義所があったこと、二つ目は校長の妹で外国人教師のミス・ポートル^{一八}との出会い、大きな要因はこの二つである。真愛学校は布教の手段として、英文と漢文の教科を習得させる目的で設立された私立学校で、現在の金沢大学に当たる四高受験のために入学する生徒も多かった。四高受験を目指した鏡花は学校を中退するが、洗礼の一步前までできていたかもしれないと村松氏は指摘している^{一九}。この学校で鏡花はキリスト教精神を学び、学校の名の由来ともなった「真実の愛に生きる心」という精神は、『名媛記』、『一之巻』、『誓之巻』、『町双六』、『海城発電』、『外科室』など様々な作品に生きているのである。

ではここからは『琵琶伝』本文中からキリスト教と関連があるとと思われる描写を抜き出して考察していくこととする。

こゝぞ陸軍の所轄に属する埋葬地の辺なりける。銃殺されし謙三郎もまた葬られて此処にあり。彼夜、(中略)意中の人は捕縛されつ。(中略)小高き丘に上りしほどに、不図足下に平地ありて公房一円十町余、其一端には新しき十字架ありて建てるを見たり。

嘗て「何うするか見ろ」と良人がいひし、それは、すなはちこれなりよ。お通は十字架を一目みてしだに、なほ且つ震ひをのける先の状には引變えて、見る／＼囚徒が面縛^四され、(略)

脱營した謙三郎は銃殺され、その後陸軍墓地^{二五}に埋葬された。こゝまではよいのだが、問題はなぜ墓に十字架がたっているかである。日清戦争時の陸軍墓地は火葬して埋葬することになっていたはずだが、十字架があるということは土葬をしていることになる。たとえ火葬になったのが都市の主要な陸軍墓地だけで、『琵琶伝』の舞台の地の陸軍墓地が土葬であったとしても、国の管轄にある陸軍墓地に西洋の宗教であるキリスト教の十字架がたっていることには少々違和感を感じる。普通なら石の墓石か木の墓標が順当なところだろう。「幻想小説」としての奇怪さや怖さを増長させたいのならば日本式の方が効果は高いのではないだろうか。それなのに鏡花はなぜ謙三郎の墓に十字架をたてる描写をしたのであろうか。思いつく理由は以下の通りである。「一つ目は陸軍墓地のは墓標は日本式のものでなくともよく自由であったから。二つ目は日清戦争から陸軍墓地では土葬から火葬になったことを鏡花は知らなかったから。三つ目は、キリスト教の教えを学んでいる鏡花だからこそ、謙三郎の墓の描写をするにあたり、救済や罪からの解放の意味を込めるために、あえて墓標や墓石ではなく十字架を作中にとり入れたから、である。理由はおそらく三つ目であろうと推察される。鏡花は故郷の金沢で十二歳から十五歳までの四年間をミッシヨンスクールで学んでおり、その学窓生活が人間形成や文学思想に影響を与えている。鏡花は作

中にキリスト教の思想が見られる小説をいくつも書いている。六二〇から、この作品もその例外ではなかったととらえてよいのではないだろうか。

お通は十字架を一目みてしだに、なほ且つ震ひをのける先の状には引変えて、見る／＼囚徒が面縛され、射手の第一、第二弾、第三射撃の響ととも、囚徒が固く喰ひしぼれる唇を渡る鮮血の、細く、長く其胸間に垂れたるまで、(中略銃殺全く執行されて、硝煙の香の失せたるまで(略))

上記の謙三郎処刑の場面に出てくる十字架は①の苦難や死・罪からの解放としての意味に該当するだろう。これから死ぬことを比喩的に読者に伝えるためだけに十字架を登場させたのではなく、死をもって謙三郎の魂は殺人というこの世の罪や決して成就することのない恋の苦しみから解放され、天国で救済されることを暗示しているのではないか。このキリスト教的救済という点に関して、若桑みどり氏は以下のように指摘している。

私はまた「外科室」の末尾の一句を極めてプロテスタント的なものと受け取る。「語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪悪ありて、天に行くことを得ざるべきか。」これが外科室の末尾の語句である。この世では夫ある者を恋する、夫ある身で人を恋するは「罪」であろうが、死んでまことをつらぬく一人の愛を、「神」はよしとするであろう。プロテスタントにとつて、神が何を罰し、何を許すかは、この世のロジックにあてはまらない。

「神よ、いと自らをいやしめる罪人と、心おこれる善人と、いずれが天に迎えられるや？」と叫んだのは、魂の救済について思い悩み、宗教改革に心惹かれたミケランジェロであった。カソリックは、この世の掟にしたがえば天国に行くのであったが、プロテスタントは、ただ神を愛する心ふかく、信ずることの熱きもののみが、救済されるのである。その場合、心がまっすぐで、雑念なく、ひたむきなものが、たとえ人を殺すほどのこの世の罪を犯しても、なお、いつそう神に近いのである。

上記の論文の引用箇所は『外科室』に関する指摘だが、これは『琵琶伝』にもあてはまる。夫の近藤重隆や社会・世間的にみれば、「夫ある者を恋する」謙三郎と「夫ある身で人を恋する」お通、この二人の行為は「罪」であるが、謙三郎は脱營し三原伝内を殺すという「この世の罪」を犯しても、まことの愛をつらぬいた。これはお通も同じで、物語の最後で夫である近藤重隆の咽喉を喰ひ破つて殺害し、まことの愛をつらぬいたのである。若桑氏の言葉を借りれば、彼らは「生と愛における新しき(新の)モラルを追求し、これが俗世間の律法と齟齬を生じたがゆえ」に死を選択し、『法律』に打ち克つ「愛」の勝利」を手に入れたのだろう。現世では許されない愛も、天国で救済される、そんな意図を持ち、この「十字架」というモチーフを鏡花は作中にとりいれたのではないかと考える。

上記のことから、鏡花が四年間を過ごした真愛学校で学んだ「真実の愛に生きる心」というキリスト教精神が、その後の鏡花文学に多大な影響を与えており、鏡花文学の思想の根底に息づいていることが分かる。作中にほとんど顕著にキリスト教に関連する描写は出

てこないが、鏡花の学生時代や文壇とキリスト教との関連、鏡花の他の作品にキリスト教的思想がみられることなどから、この『琵琶伝』も他の作品同様キリスト教的精神(キリスト教的ヒューマニズム)に基づいて書かれていると考えてよいのではないだろうか。

四 作中から読みとれる婚姻批判

『琵琶伝』は結婚の儀式である床杯の場面から始まり、当人の意向を全く無視した結婚とそれに伴って起きた悲劇が描かれる。ここからは「結婚」に焦点をあて、前述の各項目の内容もふまえつつ、鏡花が作品に込めた思いや主張を考えていきたい。まず、作中で「結婚」はどのように捉えられているのか、登場人物たち当人にとってどうかを見ていく。

御身と近藤重隆殿とは許嫁に有之候(中略)一旦親戚の儀を約束いたし候へば、義理堅かりし重隆殿の先人に対し面目なく、今さら変替相成らず候あはれ犠牲となりて拙者の名のために彼の人に身を任せ申さるべく

強情をはって結婚を承諾しないお通を結婚させるため、自ら死を選んだ父清川通知の手紙の文である。一度結婚の約束を取りきめたら名誉や面目の為にもう後戻りはできないことがうかがえる。

「通、吾は良人だぞ。」「唯、貴下の妻でございます。」「吾のいふことには、汝、屹と従ふであらうな。」「否、お従はせな

らなければ不可ません。」「ふむ。しかし通、吾を良人とした以上は、汝、妻たる節操は守らうな。」「いゝえ、出来さへすれば破ります。」「何だ!」「はい、私に、私に、節操を守らねばなりませんと謂ふ、そんな、義理はございせんから、出来さへすれば破ります!」「恐気もなく言放てる、片類に微笑を含みたり。(中略)「屹、屹と節操を守らせるぞ。」

仕方なく結婚をして近藤の妻となったことを素直に述べたお通は、はっきりとこの結婚に対して異議を申し立てる。夫である近藤重隆は、妻のお通に「妻たる節操」を求めた。これは現代のような倫理的道德的な次元の話ではなく、当時は「姦通罪」という刑法で定められており、女性は自分の意思に関係なく「婚姻」をさせられて法によって支配されていたのである。一八九八(明治三十一)年に、明治初期から編纂を意図されてきた民法が施行された。「家制度」が制定され、あわせて戸籍法も改正されて「家」が編成の単位になった。結婚で夫の家に入る妻は夫の姓を名乗ること。(以前は夫婦別姓夫と同居すること。妻の財産は夫が管理すること。結婚には戸主(親)の同意を得ること。配偶者のあるものの重婚を禁止。妻の姦通は離婚の理由になるが、夫の姦通は相手の夫から提訴されて有罪になった場合のみ離婚理由となること。上記のように、法的な婚姻には男女の不平等があった。

このように当時の女性達は本人の意思に関係なく結婚相手を決められ、さらに自由を法によって縛られていた。そんな女性の自由を奪う社会の規則に対して鏡花は意義を申し立てたかったのではないだろうか。

女の身にもなつて御覽、如彼田舎へ推込まれて、一年越外出も出来ず、折があつたらお前に逢ひたい一心で、細々命を繋いで居るものの、顔も見せないでいかれちやあ、其こそ彼女は死んでしまふよ。

これは叔母が謙三郎を説得する際に言つた一言である。お通の例は極端だが、意に沿わない事を強いられる女性の立場にたつてほしいという鏡花の思いが込められているように思われる。

宣しこそ、近藤は、執着の極、婦人をして我に節操をつくさしめむか、終生空閨を護らしめ、おのれ一分時も其傍にあらざして、なほよく節操を保たしむるにあらざるよりは、我に貞なりとはいふことを得ずとなし、はじめよりお貞の我を嫌ふこと、陀嶋もたゞならざるを知りながら、恰も彼に魅入りたらむ如く、進退隙なく附絡ひて、遂にお通と謙三郎とが既に成立せる恋を破りて、おのれ犠牲を得たりしにもかゝらず、従兄妹同士が恋愛のいかに強きかを知れるより、嫉妬の余、奸淫の念を節し、当初婚姻の夜よりして、衾をともにせざるのみならず、一度も来りて其妻を見しことあらざる

近藤はお通を嫁にしたいがためにお通と謙三郎の中を引き裂いて結婚することに成功するが、二人の思いの強さに嫉妬をして初夜を迎えることなくお通を離れに閉じ込めた。謙三郎と思いを遂げることとは二人にとっては愛を貫く尊い行為だが、近藤からすればそれは

不貞にあたる。その後の謙三郎の処刑によつて、女性の姦通罪以前にお通は心で自由に恋人を想う事すら奪われてしまつたのである。

愛を貫こうとするお通、妻を家に縛り付ける夫近藤、反社会的な行為をしても恋人に会いに行く謙三郎、婚姻を成立させるために自害した父清川通知、無理やりの婚姻を不憫に思う母、引き裂かれた恋人たちのために身を捨てた伝内など、この結婚を巡つて登場人物一人ひとりを見ても様々なドラマが展開されている。しかしここで着目したいのは、この結婚で幸せになつた人が一人もいないということである。鏡花はおそらく、このような当人の気持ちの伴わない結婚が普通のこととしてまかり通つてしまう社会の「体制」に対して、強い問題意識を抱いていたのだろう。

五 鏡花の結婚観

一八九五明治二十八年五月、鏡花は『愛と婚姻』という随筆を雑誌「太陽」に発表している。『琵琶伝』発表が一八九六(明治二十九年一月なので、『愛と婚姻』は『琵琶伝』執筆のたつた半年ほど前に書かれた随筆である。鏡花は『愛と婚姻』にある思想のもと『琵琶伝』を執筆したのであることが推察される。また、二年後に書かれた『醜婦を呵す』からも鏡花の結婚観を読み取ることができるので、こちらも合わせて見ていきたい。

まず『愛と婚姻』であるが、これは一八九五明治二十八年五月に雑誌「太陽」に掲載された。この時鏡花はわずか二十二歳であったが、とても激しい論調の婚姻制度批判の文章を書いている。

媒酌人先づいふめでたしと、舅姑またいふめでたしと、親類等皆いふめでたしと、知己朋友皆いふめでたしと、渠等は欣欣然として新夫婦の婚姻を祝す、婚礼果してめでたきか。

完全なる愛は「無我」のまたの名なり。故に愛のためにせむか、他に与えらるゝものは、難といへども、苦といへども、喜んで、甘じて、これを享く。(中略)情死、墮落、勲当等、これ皆愛の分弁たり。

一旦結婚したる婦人は、これ婦人といふものにあらずして、寧ろ妻といへる一種女性の間人なり。吾人は渠を愛することは能はざるにあらず、社会これを許さざるなり。愛することを得ざらしむるなり。要するに社会の婚姻は、愛を束縛して、压制して、自由を剥奪せむがために造られたる、残酷、酷絶の刑法なりとす。

妻なく、夫なく、一般の男女は皆たゞ男女なりと仮定せよ。愛に対する道德の罪人は那邊に出来らむ。(中略)婚姻は、蓋し愛を拷問して我に従はしめむとする、卑怯なる手段のみ。

再言す、吾人人類が因りてもて声明を存すべき愛なるものは、更に婚姻によりて得らるべきものにあらざることを。

この随筆で鏡花が問題提起しているのは以下の二点である。一点目は本人の意思を欠いた婚礼の理不尽さの指摘、二点目は眞の愛を

喪失した社会制度の暗黒さへの警告である。村松友視氏は『愛と婚姻』について、『愛と婚姻』は鏡花のエッセイの出発点であると同時に、鏡花文学の核ともいふべき意識を語る点で重要な位置を占めており、「愛の至上とそれを束縛する社会秩序への反発という構図は社会の原理を剔別する鋭利な切り口」になっている^九、との解説をしている^九。鏡花はこの随筆において恋愛至上と反秩序を叫んでいるのである。

『醜婦を呵す』は『文芸倶楽部』に一九九七(明治三十七年八月)に掲載された。この随筆では偽善的秩序の否定と女性美について述べられている。

希くば、満天下の妙齡女子、卿等務めて美人たれ。其意の美をいふにあらず、肉と皮との美ならむことを、熱心に、忠実に、汲々として努めて時のなほ足らざるを憾とせよ。

偽善的な世の中の秩序への否定と、女性美についての鏡花の考えが書かれた短い随筆である。村松友視氏は『醜婦を呵す』について、「良妻賢母風の偽善的秩序を否定しつつ語られる女性美の志向」は『愛と婚姻』の論旨と結びついて恋愛至上と反秩序を補強^{一〇}している、と述べている^{一〇}。

『愛と婚姻』と『醜婦を呵す』の二つの随筆において恋愛至上と社会に対する反秩序を唱えていることから、鏡花が「恋愛は何よりも尊いものである」と考えている恋愛至上主義者であったことが分かる。

六 引き継がれる「恋愛至上主義」の主題

一八九六明治二十九年一月、「国民之友」に『琵琶伝』を発表した鏡花は、同年二月に「文芸倶楽部」に『化銀杏』という作品を発表している。この『化銀杏』の主題は「既婚女性を束縛する封建的社會道徳への抗議^{三三}」であり、『琵琶伝』と類似している点が見られる。「結婚」は「恋」に対して俗なるものに、体制の悪の象徴として扱われている。鏡花の敵対する人の心のまことに反する「体制」は「国家」だけではなく、「結婚」「夫婦」という俗な関係も含まれており、『化銀杏』は愛なく無理強いに結婚させられた女の抵抗の物語である、と若桑氏は述べている^{三四}。『化銀杏』において鏡花の女性論が展開されている箇所を以下に引用する^{三五}。ここから『琵琶伝』と同じ主張が読み取れるだろうと思われる。

世の中は何といふ無理なものだらう。ただおさかづき^{三五}をし
たばかりで、夫だの、妻だのつて、妙なものができあがつてさ。
女の身体はまるで男のものになつて、何をいはれてもはいはい
つて従はないと、イヤふてくされだの女の道を知らないのと、
世間でいろんなことをいふよ。(中略)

婦人はいつも下手について、無理も御道理にして通さねばな
らないといふ、そんな勳定に合はないことツちやあ、あるもん
ぢやない。(中略)

一 体操を守れだの、良人に従へだのといふ、掟かなんか知ら

ないが、さういつたやうなことをきめたのは、誰だともあお思
ひだえ。一遍婚礼をすれば疵者だの、離縁されるのは女の恥だ
のつて、人の身体を自由にさせないで、死ぬよりつらい思ひを
しても、一生いやな者のそばについてなくツちやあならないと
いふのは、どういふ理屈だらう。

『琵琶伝』と『化銀杏』は、どちらも人の心のまことに反する体
制である社會のしくみ・結婚制度に対する抗議を主題としている。
鏡花は「夫婦」「結婚」というものの嘘臭さ、現行の制度と人の心の
道徳性の矛盾に問題を強く感じていたのだろう。『化銀杏』と比べ『琵
琶伝』の方が話の長さも短くより幻想的で不可思議な世界観をもつ
ているが、時期を同じくして執筆されたこの二つの作品は、構造や
雰囲気は違っているものの、物語の根底にある主張は同じである。

一八九五明治二十八年五月の随筆『愛と婚姻』、一八九五明治二
十八年五月『外科室』、そして一八九六明治二十九年一月の『琵琶
伝』、一八九六明治二十九年二月『化銀杏』と、『愛と婚姻』で述
べた思想に基づき次々と観念小説が書かれている。たった一年間と
いう短い間に、手を変え品を変え婚姻制度という同じテーマを何度
も扱っているということから、関心の高かった主題であったことは
まず間違いないだろう。鏡花は女性を拘束する婚姻制度や社會に対
して異議を唱えたかっただのであると思われる。

『琵琶伝』は、一読しただけでは「幻想・怪奇小説」である。ま
た、鏡花作品の読解において、社會的メッセージを読み取るうとする
べきではないという論もある。伊藤正も「泉鏡花という作家の小
説は、その設定やその筋を確かめて読むべきではなく、歌舞伎や文

樂のように、その場面の一つ一つを味い楽しむべきものと思う。」と
の見解を示している。

だが、私はその考えに異を唱えたい。異空間の中で物語が進行していくのが、鏡花世界の特徴である。初期の頃の作品は「観念小説」と称されることから分かるように幻想的でない設定で物語が進行しているものの、次第に鏡花独自の世界観の中で、「愛」が描かれるようになる。現実の世界では法や社会の制度が邪魔をして遂げられない「真実の愛」を証明することができるところとして、「異界」に物語の舞台を徐々に移すようになったのであろう。「琵琶伝」はそのような創作の流れの中では、ちょうど過渡期にあたる作品である。現実的でない描写は作品の最後の部分のみであり、その箇所も幻想なのはたまたま現実なのかグレイゾーンといったところで境界は非常に曖昧であるといつてよい。今日の『琵琶伝』の解釈でこの作品を「幻想小説」たらしめているのはクライマックスの教行であるが、最愛の恋人を失ったことで精神を病んでしまった狂人の所業であるといえ、医学的に納得できないこともない。咽喉を喰い破るお通の姿はまるでホラーだが、鏡花はホラーを書きたかったわけではもちろんないであろう。それよりも『琵琶伝』はクライマックス以外の箇所は非常に現実的であり、風刺的であり、鏡花の主張に満ちている点に注目したい。

読者は一読しただけでは物語の終わり方の不思議さから「幻想小説」であるとして片付けてしまいがちだが、感覚的に捉えて解釈をそれで終えてしまつてよいのだろうか。「幻想」は物語を構成する上での形式・手法であり、「幻想・怪奇」のその奥に鏡花の伝えたかった「テーマ」が隠れているのではないだろうか。

『琵琶伝』は、ただ単に師である尾崎紅葉の『やまと昭君』をアレンジしただけではない。当人の気持ちの伴わない結婚が普通のこととしてまかり通つてしまふ現行の婚姻制度への抗議、女性を縛りつける封建的社會への問題提起をしている「観念小説」であり、キリスト教の教えによつて鏡花の中に生まれた恋愛至上主義の考えが根底にある作品なのである。

おわりに

『琵琶伝』は「幻想小説」と言うよりも「観念小説」としての色が濃いのではないか、というのが今回の私の主張である。『琵琶伝』はクライマックス以外の箇所は非常に現実的であり、風刺的であり、鏡花の主張に満ちている。

鏡花が真愛学校で学んだ「真実の愛に生きる心」というキリスト教精神は鏡花文学の思想の根底に息づいている。この考え方がもとになって、真実の愛をつらぬくことは何よりもすばらしいという恋愛至上主義に至つたのである。当時の結婚制度は男女不平等なものであり、鏡花が婚姻制度に対して批判的であつた。

『琵琶伝』には社會に対する鏡花の様々な考えが書かれている。当人の気持ちの伴わない結婚が普通のこととしてまかり通つてしまふ現行の婚姻制度への抗議や女性を縛りつける封建的社會への問題提起をしている「観念小説」であり、キリスト教の教えによつて鏡花の中に生まれた恋愛至上主義の考えが根底にある作品なのであると言えるだろう。

参考文献・資料一覧

- 東郷克美『日本文学研究資料新集十二 泉鏡花 美と幻想』(有精堂、一九九一・一・七)
- 津島佑子・他『群像 日本の作家五 泉鏡花』(小学館、一九九二・一・十)
- 『新潮日本文学アルバム二十二 泉鏡花』(新潮社、一九八五・十・二十五)
- 村松定孝『泉鏡花研究(増補版)』(日本図書センター、一九九二・十・二十五)
- 松村友規編『作家の随想 三 泉鏡花』(日本図書センター、一九九六・九・二十五)
- 泉鏡花研究会『論集 泉鏡花』(有精堂、一九八七・十二・二十)
- 脇明子『増補 幻想の倫理』(沖積社、一九九二・十一・三十)
- 泉鏡花「愛と婚姻」(『作家の随想 三 泉鏡花』、一九九六・九・二十五、初出:『太陽』、一八九五・五)
- 泉鏡花「醜婦を呵す」(『作家の随想 三 泉鏡花』、一九九六・九・二十五、初出:『文芸倶楽部』、一八九七・八)
- 尾崎紅葉「やまと昭君」(『紅葉全集第一巻』、岩波書店)
- 手塚昌行『鏡花文学の変容』(『論集 泉鏡花』、有精堂、一九八七、越野格『鏡花小説の二構造』(『論集 泉鏡花 第二集』、有精堂、一九九一・十一・三)
- 若桑みどり『鏡花とプロテスタンティズム』(『群像日本の作家五 泉鏡花』、小学館、一九九二・十一)
- 『岩波 女性学事典』(岩波書店、二〇〇二・六・二十)

一 作家が時代や世相から触発された観念を明白に具象化している小説のこと。特に、日清戦争後に現れた、社会の不合理を描いた作品群を指す。「観念小説」という言葉は島村抱月の「小説を読む眼」(『読売新聞』、一九五八・二十六)が初出。同年の一九五五(明治二十八年)九月、坪内逍遙が『時文月旦』(『早稲田文学』九月号)でその定義を承認したことで文壇に定着した。泉鏡花の『夜行巡査』『外科室』、川上眉山の『書記官』『うらおもて』などが観念小説の代表作としてあげられる。嶺雲主催の『青年文』をはじめ「帝国文学」「国民之友」「文学界」などの雑誌が、こそってその作柄に注目した。

二 超自然的な怪異や別世界など、現実にはあり得ないといわれる事象を扱う文学のこと。日本における幻想文学は、上田秋成が中国の小説を取り入れつつ日本古来の幻想性を描いたのが始まり。明治後期から大正にかけては、近代化に向かう圧倒的な時代の流れの中で泉鏡花が築いた独自の世界観は日本の幻想文学の頂点だとされる。二〇世紀にはシュルレアリスムによって「幻想や夢」が創作の源泉として捉えられたものの以前として幻想文学はマイナーな位置にある。幻想文学の遺産は児童向けファンタジーや『宮』へと広がっている。

三 一八八九(明治二二年)文庫(第一九号(四月五日)と第二三号(七月五日))の「心織筆耕」欄に連載。全四回。

四 中国の詩人白居易七七二-一八四六の長編抒情詩。白居易が江州の司馬に左遷された時期の作品。「長恨歌」と並ぶ感傷詩の代表作。八一六年成立。

五 元末から明初に成立した、歌曲と賓白(せりふ)から成る中国の古典劇。四二幕の長編で、文辞もよく洗練されており、南方系の楽曲を基調とする南戯の最高傑作とされている。作者は高明(一三〇五-一三三〇)。

六 紀元前三三年に匈奴に嫁いだ悲運の女性である王昭君についての故事。この故事を題材にした文学作品は晋の『玉明君辞』、元の『漢宮秋』などが有名。結婚を強いられた例、馬上で琵琶を弾き自分を慰めるところからオウムに琵琶の名がつけられた。

七 『新潮日本文学アルバム二二 泉鏡花』新潮社、一九八五・二〇・二五、「硯友社 従弟時代」の記述より。

八 『琵琶伝』の同時代評である、青年文記者『琵琶伝』(『青年文』、一九九六年二月一〇日)の評価。

九 『琵琶伝』の同時代評である、桂月『青年小説を読む』(『帝国文学』、一九九六年三月一〇日)の評価。

一〇 脇明子『増補 幻想の倫理』(沖積社、一九九二・一・三〇)、「一 鏡花とい

う世界」より。

二 初出…『太陽』、一八九六(明治二九)年一月

三 ガマの穂のような、赤みがかった黄色。

四 罪を犯して縄で縛られること。罪人としてとられた人のこと。この場面では謙三郎が捕縛されている。

五 四日清戦争の旅順攻略の際、市内及び近郊で日本軍が清国軍敗残兵掃討中に旅順市民も虐殺した事件。日本軍死傷者に凌辱的行為を行ったことに対し敵討ちの感情を抱き、軍服を捨てゲリラ的に戦う兵士と住民の区別がつかず第一次の掃討を行った。第二段階の掃討は捕虜をとるということをしらず殺害に重きを置いていた。被害者数は日本の研究では二〇〇〇〜六〇〇〇名とばらつきがある。

六 北陸英和学校は一八八五(明治一八年)の一月から始まり、校舎は金沢市広坂通りにつくられた。

七 一八八三(明治一六年)二月から一八八四(明治一七年)年の二月まで、金沢市殿町五六番地にあった。鏡花の生家は下新町二三番地であるため、今町と尾張町の二つの通りを横切るだけである。

八 宣教師ゼー・ピー・ポートル。学校で教鞭をとるかわら金沢市の金屋町でキリスト教の講義所を開く。

九 校長の妹、フランシイナ・ポートル。兄を助けて講義所で伝道に当たっていた。ミス・ポートルに聖母マリアの信仰の対象である亡き母の面影を重ねた鏡花はミス・ポートルをとて慕っていた。鏡花の小説でモデルとして登場する。『名媛記』のりりか、『誓之巻』のミリアード、『町双六』の馬上の女教師など。

十 村松定孝『泉鏡花研究く増補版』(日本図書センター、一九九二・二〇二五)より。

○ 初出…『活文壇』、一九〇〇(明治三三年)一月、白水楼主人の名で掲載。

○ 初出…『文芸倶楽部』、一八九六(明治二九年)五月〜一八九七(明治三〇)年一月までの連作。

○ 初出…『新小説』、一九一七(大正六)年

○ 初出…『文芸倶楽部』、一八九五(明治二八年)六月

○ 両手を後ろ手に縛って顔を前方に差し出すこと。

一五 日本葬送文化学会によると、日本で最初の陸軍墓地が建設されたのは一八七一(明治四年)四月一〇日、大阪の真田山陸軍墓地が最初。敷地は八四九七坪。当時は土葬で座棺を使っていたので一人一坪として八〇〇〇人以上のスペース

を確保していた。墓地内には招魂社も設置され、死体の埋葬と霊の埋葬という両面からサポートしていたことも分かる。陸軍墓地が建設される前の戊辰戦争の頃などはその場で埋葬していたそうである。埋葬法は時代とともに変わり、一八九四年の日清戦争時は火葬して埋葬する規則が出来た。一九〇四年の日露戦争時には戦場掃除および戦死者埋葬規則が制定され、味方は火葬し敵は土葬した。

一六 村松定孝『泉鏡花研究く増補版』(日本図書センター、一九九二・二〇二五)の「鏡花とキリスト教」に記述あり。

一七 『名媛記』『誓之巻』『町双六』『海城発電』など。

一八 若桑みどり『鏡花とプロテスタントイズ』(『群像日本の作家五泉鏡花』、小学館、一九九二・二〇一〇)

一九 村松定孝『鏡花とキリスト教』(『泉鏡花研究く増補版』日本図書センター、一九九二・二〇二五)より。既成のモラルを越えようという戦いを自らの作品

で試みるに至った理由は、ほとんど悲願ともいべきもの。それが鏡花に観念

小説を構想させたロマンティズムの正体であり、これを村松氏は「キリスト教的ヒューマニズム」と名付けた。

二〇 松村友規編『作家の随想三 泉鏡花』(日本図書センター、一九九六・九二

五)巻末の解説より。

二一 松村友規編『作家の随想三 泉鏡花』(日本図書センター、一九九六・九二

五)収録『醜婦を呵す』本文より引用。

二二 注三二に同じ。

二三 手塚昌行『鏡花文学の変容』(『論集 泉鏡花』、有精堂、一九八七)

二四 若桑みどり『鏡花とプロテスタントイズ』(『群像日本の作家五泉鏡花』、小学館、一九九二・二〇一〇)

二五 『化銀杏』の十の段より引用。すべて一連のお貞のセリフ。

二六 婚礼の夜、新夫婦が寝所で杯を取り交わす床杯の儀式のこと。『琵琶伝』にも床杯の描写がある。